

前田 壽己知氏



築二〇〇年を超える古民家、それを取り囲むように広がる日本庭園。両者が醸し出す日本の伝統的な美意識に思わず引き込まれた経験はないだろうか。この伝統美を守りながらも独自の視点で庭造りに挑み続ける岐阜県可児市の造園業「庭萬」の前田壽己知（としみち）会長に庭造りにかける思いを伺った。

前田会長は自らを「作庭家」と名乗る。造園家や庭師との一線を画する同氏のこだわりが見て取れる。京都の造園関係の企業に就職を決め、面接のため京都の本社に向かつて入社の手続きを無事済ませたあと、余った時間で右京区の竹林で知られる嵐山公園方面に足を延ばした。そこで運命的な出会いとなったのが大河内伝次郎の別荘だ。昭和初期の映画俳優、大河内伝次郎が三〇年近く守り続けた山荘と、周辺に広がる日本庭園。時代によつては銀幕をにぎわした高峰秀子や片岡千恵蔵、山田五十鈴らが出入りしていたという。ちなみに今では、大河内伝次郎の山荘は観光ルートに選ばれている。

前田会長はこの大河内伝次郎の山荘を前にして「一目見て痺れた。私もこれと同じものを作ってやる」。数時間前に造園関係の会社

から入社通知をもらったばかりの身で、造園の技術どころか知識も満足にない若者が大口を叩いていると思うほかない。ここから前田会長のストーリーが始まったのではないか。

岐阜県可児市の小高い丘に昭和二十年創業の「庭萬」（岐阜県可児市羽崎）がある。その近くに前田会長は、日本の伝統美にこだわった豪壮な山荘を完成させた。本体は富山から移築した築二〇〇年近い古民家。まず目を引くのが数寄屋造りの苔むした屋根。前田会長が携わってきた工事を通して学んだ技法を活かし、独自の工法にたどり着いた。屋根棟の上に鉄板を敷き、ゴム板、桧皮の順に重ねフェルト板の上に砂を敷き詰め苔の土壌にしている。これで屋根の苔が一段と映えるという。屋根には地元陶芸家に作らせたヒョウ